
心を読むのは禁止です

恋時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心を読むのは禁止です

【Nコード】

N0399M

【作者名】

恋時雨

【あらすじ】

杏里が引越してきたマンションには心を勝手に読む男子がいて！？しかもその人とはお隣さんで・・・？

黒髪で右の耳にピアスをしていて・・・凄くカッコ良かった。服装も悪くはない・・・

私と同じ20歳ぐらいかな・・・

「黒髪で右耳にピアスをしていて、凄くカッコイイ。服装も悪くない。私と同じ20歳ぐらいかな・・・って思ったよな？ふはははは！！！！！！！！」

なんだこの人。
気味が悪い。

「なんなんですか？貴方は！人の心勝手に読まないで下さい！」

「君面白い！そだ。俺は 黒沢 翼 よろしくな」

「くろさわつばさ・・・？（普通の名前・・・？だな）」

「だよな！。普通の名前だろ？笑」
またよんだ。

「読まないでくださいよ！恥ずかしいじゃないですか・・・」

「なーんか変なことでも考えてるのか？恥ずかしいような。」

「考えません！／／あと、私の名前は 平野 杏里」

「杏里ねーまたなー」

彼はそう言っつて優しく微笑んだ。
ガチャッ。

どうやらあの人は隣の部屋らしい・・・

【とあのひととの出会いだった】

【これが私】

「ゲームの始まり」【2】

あの出会いから二日たった

あの人とはなんの出来事もない

いつものように

毎日毎日告白される日々。

私だって・・・恋したいのに・・・

告白されるばかりで

恋愛どころじゃないよ・・・

「ああー！！もー恋愛させてくれー！！！！」

私は部屋のベランダから大声で叫んだ。

「うるさいんだけど・・・静かにしろっ笑 近所迷惑」とにっこりと笑った。

「ああ・・・すいませーん」

「いやー別に俺はいいんだけどさー。つかーなに恋愛させてくれーって・・・」

「いえーまー・・・いろいろありまして・・・」

「なにになにつ！？」

笑顔が眩しかった

私はすべて話してしまった・・・。

「へー。そーいうこと・・・じゃあさー俺と付き合っ？・・・俺と恋すらいい」

なにを言ってるんだこの人!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
バカか!? バカなのか!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
?????

「へ? どういうことですか?」

「んーとまあさ・ゲームだよ。本気になったら負けって言う。まあ。ために俺と杏里が付き合うだろー。でいろいろやって最後
に本気で好きになったら負け。ま・遊び半分で付き合うんだよ。
俺ら家隣同士だし誰にも邪魔されないだろ?」

「いやーその・そーですけど・遊び半分で付き合いたくないっ
ていうか。私はふつーに好きになつてーふつーに告白してふつーに
いろいろして・っっていうのがいいんですよ!」

「へーそんなもんかねー恋なんてそんなにうまくいかないもんなん
だよ? 実際。君の夢のようににはならねーの。」

なんなんだ本当にこの人。

恋をなめてるよ・私は夢を見てますよ!!

別にいいじゃないですか!! ほっといてくれてかんだよ!!

「でもやつぱり私は・そういうのは嫌ですから」

「そー・君ってつまない女だね」笑顔で言われた。
プチッ

私の中のなにかがキレた。

「なんなんですか? 本当。てめえなさつきから聞いてると!! わか

[illegible]

「ふはははっ。わかったよ。絶対本気にさせるから」

こうして私達のゲー

ムが始まった・・。

「想い」【3】（前書き）

ちよつとグダグダだったらすいません・

「想い」【3】

ゲームが始まって一日目。

「杏里ー」

隣の部屋から声がする。

私は窓から

「なんですか？」

と問いかけた。

「今日さー。どうかいかなーかぁ？俺ら恋人同士だしさー」

「飯ですけどねー。いいですよ。別に今日は暇ですし。」

「それじゃあ、今日の一時なー前の公園で」

「わかりましたー」

前の公園って・・・家隣同士なのになぜ前の公園に集合なんだろう・・・
おかしな人だな・・・

（一時）

到着。

黒沢さんが来ていた。

「待ちました？」

「ううん。別にっ。（にしても・・・可愛いな。杏里。本気の方じゃねーけど）」

杏里は今日、フリフリのワンピースを着ていて、リボンがついていて・・・とにかく可愛いです。

「まっついーぜ」

そういうと手をつないだ。

「あのー黒沢さんー・・・どこ行くんですか？」

「んとーショッピング？ それと。杏里俺の事呼び捨てでよんでいいよ」

「へっ・・・？ いやいや・・・いいですよ・・・私は黒沢さんで」

「なんでっ？ 俺達同い年だし。呼び捨てのがいいって。翼でいい」

「えと・・・その男の人を呼び捨てとか・・・したことなくて・・・ですね／／／」

「早くよべよ」

「まだだ・・・笑顔が怖い・・・」

「つば・・・っ／／／翼？／／／」

「（可愛すぎなんだけど・・・）それでいいんだよ」「ニッコリ。まだ顔が赤い杏里だった

「なあゝ杏里 行きたいところとかないか？」

私達は今お店の中でお茶中。

「そーですねゝお願いなんですがゝあそこによってください」
杏里の指差す方には。

可愛いロリータ系のぬいぐるみが・・・

「いいよ」

喜んで翼は答えた。

「ありがとうございます。」

パアアア！！！！！！

「可愛い」

ワイワイはしゃぐ杏里。

それはまるで子供のよう。

「（なんか可愛いな／＼／＼って何思ってたんだ？俺・・・）」

「あーもー可愛いよお・・・」

「杏里ってぬいぐるみ好きなのか？」

「えっ・・・あ！うん！大好きだよ！恥ずかしいけどw
あれ？杏里・・・敬語使ってないな・・・」

「へー。じゃあ買ってやるよ」

「いいの？　って悪いからいいよ」

「いいんだよ？てかもう買っちゃったし。」

「ありがと・・・」

＝帰り＝

「んじゃあ帰るかあ」

「はい。今日はありがとうございました。ぬいぐるみまで買ってくれて」

「いって　つか、杏里敬語やめてほしんだけど」

「いや・・・でも」

「恋人だしよ。いいだろ？これだけは聞いてくれよ」

「そうですね・・・ぬいぐるみも買ってくれたし・・・いいですよ。別に」

「ありがとな」ニコリ

「（あれ・・・なんかカッコイイ・・・）」

「あー今カッコイイとか思っただろ・・・」

また・・・この人は・・・人の心を・・・っ！！！！！！！！！！
どうする・・・？殺るか？今ここで殺しておくか？

ちよつと殺意が芽生えた杏里だった。

家へ到着。

「じゃあな　今日は楽しかった」

「あ・・・うん。私も」

「はは。また行こうなあ？」

「うん」ニツコリ

それは彼女が初めて俺に見せた笑顔だった。それはとても可愛い。天使のような笑顔だった。

俺は一瞬・素敵なキモチになった。それと・同時に俺の体が勝手に動いた。

気づくと彼女の唇と俺の唇がかさなっていた・

「へっ？／／ええ？おっ？あ？えっえ？ふあ？／／」
おどおどしていた彼女はとても可愛かった。

「わりい／／俺はそのっ！！好きでやったんじゃねーから／／／
なんか急に体が動いて！！だから！したくてやったんじゃねーぞ／
／／」

「へっ・・うつうん」

二人の顔が一気に赤くなった。

そして部屋に戻りベッドの中

（翼）

「なにやってんだよ。俺、好きじゃねーのにキスなんて・・どうかしてる」

そして眠りについた・

（杏里は）

「キス・・・初めてだ。しかも翼と・・・はあ・・・気まずいな・・・明日」
そんな事を考えながら寝た。

（朝）

「やばい！！今日はゴミだしだあ！」
急いで外に出た。

それと同時に隣のドアがあいた。

最悪だ・・・タイミング悪すぎ・・・
杏里は心の中でそう叫んだ。

「あ・・・杏里。」

「翼・・・」

静かになった。

二人の間にいやな空気がながれる・・・

「そだ。私ゴミ出さなきゃだめだから」

「ああ・・・昨日はごめんな／＼」

「いいよ・・・別に、嫌じゃなかったし」

私はなにを言ってるんだろ　って思った。

「じゃあね」

ぎゅっ

翼が後ろから抱きついてきた。

「はっ？」

私は一瞬なにがおきたのかわからなかったー・・・。

「ごめん・・・少しだけ・・・我慢して」

「なっ？どうしたの？本気になったあゝ？」
遊び半分でそう言った。

「わかんねーよ・・・なんかキスしたくなったり・・・抱きしめたくなくなるんだよ・・・／＼俺もわかんねーんだよ／＼」
翼は少し照れ、顔を隠ししゃがみこんだ

「翼・・・恋した事ないの？」

「あるよ・・・でもなんか・・・今までとは違う感じだし」

「クスクス」少し軽く笑った。

「なんだよ／＼」

「だってさー。翼面白いんだもん」
私は翼と同じぐらいにしゃがみこんだ

「ねえ。翼ってモテるでしょ」

「そんなことねーよ・・・つかなんでそんな話になるんだよっ」

「まあまあw バレンタイン何個貰った？告白は何回された？」

「バレンタインは500個ぐらい。告白は1000回ぐらい。杏里は？」

「モテるじゃん・・ 私はー。チョコが300個で告白が3000だよ」

「すげーな・・さすが。チョコ普通はあげるほーじゃねーの？」

「そーだよ？」

「（笑 それよりコミ」

「・・・・・あー。もー間に合わない・・」

「ははっ・・わりw」

「あのー笑いながら言われても全然・・ うんっ！いいよ！！気にしないで！！とか言えねーし・・・・・だから許さん！！」

「ええーw w w w」

「はははっ」

二人が笑い合っているところに。

「杏里ー！！！！」

向こうから男の人が来た。

「あっ！隼人！！」

隼人とは・・？一体誰なのだろうか・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0399m/>

心を読むのは禁止です

2010年10月28日08時36分発行